



徐福の墓（波田須）

“徐福”は今も熊野に生きている

熊野徐福研究会 三石 学

全国に二十数箇所も徐福伝承があるのは、ごく自然な成り行きで、対馬海流、黒潮の流れが、徐福文化をいろんな地域に伝播させています。漂着伝承の多い熊野もその一つと考えます。

私が残念に思うのは、不老不死の仙薬の話ばかりがいつも前面に出て、一等の文化・技術を持った百工を従えて上陸した徐福の文化的貢献度の検証がなされていないと思っています。農耕、養蚕、捕鯨、造船、医薬、紙漉き、機織り、製鉄、焼き物など徐福が伝えた文化をも私たちは引き継いでいます。

十四世紀に中国に渡った土佐の僧侶・中津絶海が明の太祖の前で徐福の事を聞かれて「熊野ノ峰前 徐福祠 満山薬草 雨余ニシテ肥ユ 万里好風須ク早帰スベシ」の詩をもって答えましたが、まさに熊野の地形や天候、植生を見事にあらわしています。徐福の宮がある熊野市波田須（はだす）町は滝沢馬琴の『椿説弓張月』にも記述されているアシタバやツリガネニンジンなどの薬草が生い茂っています。現在も操業される熊野の捕鯨の技術は、九州・壱岐対馬や五島列島などに及んでいます。

江戸時代まで秦住（はたす）あるいは秦栖と呼ばれていた波田須では、秦の始皇帝時代に鑄造された貴重な大型半両銭が発見されていますが、その他にも徐福の痕跡がいろいろな場面で見られます。

徐福の宮のご神宝の播り鉢は中国製と伝わり、「釜所」という場所から発見されているし、製鉄の際の鉬（ケラ）が見つかる場所は京楽尾（けらお）と呼ばれるなど随所にゆかりの地名があります。徐福の宮がある矢賀（やいか）などは最たるもので、焼き物を焼いた所の焼処に由来があります。

こうして、守り継がれた徐福文化を今一度、認識し復興させようと平成十三年十一月に熊野徐福研究会を立ち上げました。

九州・佐賀や福岡、丹後半島など徐福ゆかりの地を視察したり、地元の研究者と交流したりして知識を深めてきました。また、平成十四年十一月には熊野市では初めての徐福国際シンポジウムを開催しました。

このとき、地元の音楽ホール「天女座」で住民が主役となって徐福劇が演じられました。今年も2回目の劇が上演されましたが、こうした試みが徐福への理解、親しみを深めると共に、現在にも徐福の精神や文化が生きているという実感を私たちに与えてくれます。徐福は子から子へという遺伝子により生きつづけているのです。上陸した場所がどこであるかが問題ではなく、徐福の精神が活かされているということが大事なのではないかと考えます。



波田須 徐福上陸地と釜所の風景



徐福の宮近くで発見された 秦の時代の大型半両銭



徐福の宮ご神宝のすり鉢